



ピッポ新聞

2012

1

No.259

子どもの本専門店 ピッポ

ピッポ古書クラブ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3
TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>
E-mail itoh@pippo.co.jp

つれづれ雑感

病床で思出すのは

山行あれこれ

年が新たまつて以来、どこか近くの山に登りたいなと思っていました。十五日の朝、ベッドの中で「そつだ、きょう『竜爪』へいってみよう!」と、思いたったのです。

竜爪山は中学生の時から何回も登っていますから、このベッドの中でだつて、その所々の登山道の様子を思い描くことができます。今のぼくの状態では穂積神社までどのくらいの時間を要するだろうか、最後の連続する鉄のハシゴはどんな感じで通過できるだろうかなど想像すると、もうぼくは頭の中で登山を開始していました。

竜爪山は、山といったつてハイキング程度のものですから、今の体力がどんなものか知るには好都合の山です。

これまでだつて、ハードな山や溪流釣りにでかけるまえには、自分の体調を確認する意味で、店を開ける前にはよく登っていました。

なぜぼくが「体力の回復」を気にするかと言えば、去年の十月に前立腺ガンの摘出手術を受けたからです。そのさい、医者が予想していた以上に出血がおおくて、貧血状態が続き、退院後しばらくは自分の家の二階へ上がるのにも少し息切れがしていました。医者はすぐにでも以前

の生活にもどつてもかまわないと言い、退院時にわたされた薬も増血剤のみでした。

ぼくもそのつもりで退院の翌日から、手術前のように仕事を開始しました。しかし、機械は故障しても、その修理さえ完了すればすぐにでもフル回転で使えるのでしようが、生身の人間はそうはいかないようです。

たいした貧血ではないというのに、持続して体を動かすと、息切れや疲れが出て筋肉が動かなくなつてしまいます。それに、開腹手術をしたわけですから、力を入れたりすると傷跡にも響きます。

ですから、退院して一ヶ月半ぐらひは、午後の2時間ほど横になっていました。こんなありさまでしたから、ジョギングを再開したり、山に登つたりするなどは思いもよらないことでした。退院してしばらくは、以前の体重よりも三キロばかり減量がなつていたのですが、それもいつしか元に戻つてしまいました。

これではいかな!

そこで、思い切つて一月一日午前、退院後初めて走ってみました。なんとか一時間走つたのですが、他人が見ればとうていジョギングをしているとはおもえなかつたことでしょう。距離もスピードも手術前には及ぶべくもありません。これまで二度走り、迎えたのが一月十五日というわけです。

さて、ぼくは山へ出かけるときには、たとえそれがハイキングだろうが、冬の山だろうが、携帯用の魔法瓶(確か横文字の呼び名があつたん

だが、おもいだせないな)を必ずもつていきます。寒い季節は、その中味は暖かいお茶にかぎるのです。

これを行動途中や頂上で飲むのは格別です。何故ですって?そりゃ、自然の中を歩いていて、これを飲むと自分がとても満たされた気持ちになるからです。特に雪山ではそうです。コーヒーや紅茶も大好きだけど、山ではね、やっぱり「お茶」でなければいけないよ。

あるとき冬の山のことを話していたら、知人が問うてきた。「冬山のテントの中ってどんな感じですか」。ぼくは少々自慢げに答えるのです。「それはね、前の夜に雪で沸かしたお湯が、朝になると氷っていて魔法瓶の口が開かないってことなのさ」。「それからね、シュラフの息のあたる部分がパリパリに氷っていることでもあるな」。知人はそこで「へー」って感心してくれるのです。

種を証せば、夜中に暗闇で飲んだお湯が少しこぼれ、それが凍結して蓋が開かなくなっただけなんだけどね。

そのときの魔法瓶もこれなんだ、これはもう二十年以上も使っているやつなんだ。この朝も、それをカミさんにだしてくれと言ったら、カミさんは最近自分が買ったのを出してきたのです。それじゃなく、いつも山に持っていくでこぼこの魔法瓶だと、ぼくは注文をつけました。

どうやらカミさんは「物」にたいするこだわりってものがないようです。

いまじゃ、登山用品屋にいけば、チタン製のもつと軽くてスマートなやつがあるけど、やっぱりこのでこぼこの魔法瓶じゃなけりゃね。といっても、これは、ぼくの勝手な思い入れなのですがね。

思い入れといえ、ぼくは四十年以上も使っているアタックザックを、このときも背負ったのです。この赤色のアタックザックはだいたい色褪せていて、最近のザックのように腰で止めるバンドも付いていません。アタックザックへの「思い入れ」なんて大げさに言っていますが、白状すればその根はとても浅いのです。

あるとき、山で出会った若者がぼくのザックを指して「そのザックの色、ものすごく貫禄がありますね」と言った。その一言が、妙にぼくの低い鼻をくすぐったのです。

ぼくはこのアタックザック以外にも、ザックを三つ持っています。もちろんそれぞれ用途は少しづつ違いますが、それ以来これを使うことが、断然多くなったというわけです。

本当に単純だな!

「オレにはまだやりたいことがある!」

ところで、「ガン」など、これまでずっと無縁な存在だと思っていましたから、いざ「ガン」を宣告された時はびっくりしてしまいました。

医者から「あなたはガンですよ」と、告げられた人は数限りなくいたでしょうが、

いざそのとき、人は最初にどんなことを想い描くものなのでしょう。

ぼくの場合は、「オレには、まだやりたいことがある!」だったのです。

崇高なことを思わないまでも、どうして「家族の将来が心配だ」などと頭に浮かんでこなかったのでしょうか。なんと身勝手なんだろうと、いま考えると恥じ入るばかりです。こういうときに、人間性が表れてしまうのです。

それで、「オレにはまだやりたいことがある」の内容ですが、それがまた、けつして他人さまに公言できる代物ではありませんが、しかし、頭に思い描いたことも紛れもない事実ですから仕方ありません。

それは二つ

一つは長年の夢であるヨーロッパに登りたいということを無性に想い、後一つは、古本屋をもつと続けたいということでした。

ヨーロッパに登りたいという気持ちは、一種あせりをともなっていました。もしかしたら、このまま長年の夢が、夢で終わってしまうのではないかとというあせりでした。

今回の手術で十一日間入院しました。が、入院二日目に手術をし、翌日から歩行訓練をしました。最初は体のそこかしこを管でつながれていて、数えてみると全部で五本もありました。そんな状態でも、本も読めないことはなかったのですが、とにかく体を動かすたびに痛みが伴うので、読書

も長時間は無理です。そうになると、ベッドでは時間をもてあまします。

テレビもベッドで見る「ことができませんが、今の自分のおかれている状況と、映し出されるテレビの内容とがあまりにも落差があり、テレビなど見る気はおこりません。そこで思いついたのが、これまでの山行や釣行を頭のなかで反芻することでした。

レオ・レオニというアメリカの絵本作家がいます。彼の作品で一番有名なのは「あおくとときいろちゃん」という絵本でしょう。しかし、ぼくが好きなのは「フレデリック」です。

『フレデリック』（好学社刊）は今、当店では売れてしまっていて手元にないたため正確にはお伝えできませんが、内容はだいたい次のようなものです。

夏の時期、仲間のねずみたちはせつせと来るべき冬のために働いている。フレデリックは働かずにただただ花を見たり、風を受けたりしているだけだった。やがて冬、穴にこもったねずみたちは、はじめえは集めた食糧を食べたりしてやる「ことがあったが、やがて時間をもてあましてきた。そこでフレデリックが語りだすのです。花はどんなにすばらしい香りや色だったかを、夏の風がどんなだったかを。仲間たちは拍手喝采「フレデリック、きみて詩人じゃないか」・

フレデリックは仲間たちのために語りま

すが、ぼくはベッドの上でもてあました時間を自分だけのために、これまでの山行を思い出していました。

幸いなことにぼくは、単独行が多いですから、その分、五感をふる稼働して山を楽しんでいます。こんな点が、勝手にフレデリックに似ているとおもっているのです。

それはどんな風に思い描くのかと言えば、雪面を「キシキシ」音をとをさせながらアイゼンを踏みしめ、その音を小気味よい音として自分で満足している姿だったりするわけです。

元旦に、夫婦喧嘩を 誘因してしまた「風呂騒動」

まずは、ある時の山行の印象深い場面が頭に浮かびます。

それは、そば屋（民宿だったかも知れない）の夫婦が部屋の奥で口論をはじめたその声が甦ってきます。

ぼくはといえば、上がり込んだこちらの部屋で、その声を聞き、身の置きどころがない気持ちにとらわれていました。

ある年の一月元旦のことでした。この日、ぼくは燕岳から下山してようやく宮城（みやしろ）のゲートにたどり着いたところでした。目に付いたのが「そば有り」の貼り紙でした。躊躇せず飛び込んだわけですが、

中に入ったら、今度は「風呂にはいれませぬ」の貼り紙に目が吸い寄せられていました。

そばを注文した後、奥さんに風呂に入れるか聞いたら「良いですよ、ただわくまで少し時間が掛かりますが・・・」というのです。ここまで下山すれば、風呂に入るためなら、多少の時間を要しようが否やはありません。下山しての一風呂に勝る魅力はありませんもの。

それからしばらくして始まったのが、先ほどの夫婦の口論というわけです。

考えてみれば、今日は元旦、ダンナにしてみれば、ゆっくり一杯飲みたいのが道理というものです。そこに変なオヤジが飛び込んできて、「そば」だけならまだしも、「風呂」まで入れると言うのだから、口論にもなるというものです。よく考えれば、貼り紙はこの日のためにわざわざ貼ったわけではなく、常日頃のもので、むしろ、今日に限ってはこの張り紙は休みと解釈すべきだったのです。

でもね、口論は聞こえていても、ことは進行していますから、ぼくとしてはいままら断ることはできません。身を縮めて風呂に入りましたが、気分的にはくつるげるはずもありませんでした。

冬の燕岳はアプローチが長いのが難点です。中房温泉まで宮城のゲート（冬期はここで林道は閉鎖されている）から十二キロ五時間余り歩いてその日は温泉に泊まり、翌日朝、燕岳を目指します。そして頂上近くの燕山荘に一泊して下山してきました。

山行を思い出す切っ掛けは、そのときどきに耳にした音だったり、目に残っている

花の色だったり、あるいは強風のなか顔に
当たる雪礫の痛さだったりします。

入院した病院は小高い場所に建っていて、
どの病室の窓からも外の景色を眺めること
ができる作りになっていました。このこと
は、患者の立場にたつてみて、とても気持
ちが慰められることなのだと気付きました。

ぼくのいた部屋は六階で、南東の景色が
望まれます。毎朝六時を少し過ぎると、伊
豆か箱根の山(?)の端に、真っ赤な太陽
が顔を出します。日の出は毎日少しづつ西
へ移動します。もちろん山の端は凹凸の連
なりです。毎朝日の出を眺めていたぼくは、
明日はきつとあの凹んだ真ん中から太陽が
昇るだろうと予想し、その通りに太陽が顔
を出すと一人喜んでいたのでした。

一番のお気に入りには、最上階にある喫茶
室から見える富士山でした。体に繋がれて
いる管の数も減ってからは、(それでも管は
まだあったが)毎日喫茶室へ出かけてコー
ヒーを飲むのが楽しみでした。

ここから見えるのは、御殿場側の富士山
ですから、普段ぼくが見ている富士山の姿
とは違います。それでも頂上付近を流れる
雲を追っていると、登ったときのことを思
い出す。クラストした雪にアイゼンを蹴り
込んで息絶えだえに頂上に立ったことや、
苦労してスキーを担いで登り、下るときに
なってターンするたびに転び、しかたなく
又スキーを担いで下ったことなど、これま

での富士登山を思い描いたものでした。

過去の登山の話をしていけば尽きること
はありません。登山もそうですが、溪流釣
りも色々思い出して反芻して楽しんだので
すよ。したがって、ぼくは入院中時間をも
てあますことはありませんでした。

しかし、入院中に山の追体験をしていた
ら、困ったことができました。それはヨー
ロッパアルプスに登りたいという願望がも
はや押さえることができなくなってしまう
ことです。もはや、体力的にマッターホ
ルンには登れないとしても、この目で直に
見たいのだ!

さて、竜爪山に話を戻して、今回は終わ
りにしましょう。

九時二十分に歩き出したのですが、途中
でバテても困りますから、調子がでるまで
超スローペースで歩きます。最初は沢の左
岸に添って緩い登りです。久しぶりの山な
ので、ぼくは山道を歩く喜びをかみしめて
いました。一時間近くかかって穂積神社に
着きました。

ここで一息いれ、何を思ったか、これま
で一度もあげたことのなかったお賽銭を賽
銭箱に投入して手を合わせたのです。再び
山を歩くことができたのが、とても嬉しい
ので神(?)に感謝です。

神社からしばらく行くと、鉄の階段が連
続して稜線近くまで続きます。もともとは

階段など無かったのですが、ある時の大雨
で山が崩落して以来、しばらく登山できな
かったのですが、階段が設置され、再び登
山が可能になったのでした。予想していた
とおり、途中で息切れがして、一気にこの
連続した階段を通過できずに、途中で一息
入れ、稜線にたどり着きました。

竜爪山は名前の通り二つの山からなっ
ています。最初の頂が千五十一メートルの薬
師岳といい、そこから少し下って再び少し
登ると次の頂が文殊岳で、こちらは千四十
メートルです。薬師の頂上は樹林に覆わ
れていて見晴らしが利きませんが、文殊か
らは清水港や、日本平の山(有度山)をは
さんで駿河湾を眺めることができます。

この二つの山を静岡や清水の街から見ると
あたかも竜の爪のように見えることから竜
爪山と呼ぶのだそうです。

ここでパンを食べ「魔法瓶のお茶」を飲
み、景色を堪能して下山です。車のところ
に戻ったのが十二時半でした。たった三時
間の山登りでしたが、手術後初めての登山
は楽しかったです。

編集後記

長い間ピッポ新聞を休刊
してしまい、申し訳あり
ませんでした。今後も可能な限り発行いた
しますから、お読みいただければ幸いです。

次号より本の情報もお知らせいたしますか
ら、お楽しみにお待ちください。 店主